

書教育

書写・書教育に求めるもの

野坂 武秀

はじめに

毎年参加者の確保に苦勞する分科会であるが、今年は少ないながらも初参加者がいたことに感謝したい。

ちなみに初参加者は、現任校に元々いた書道の教員の転勤に伴い、新たな教員が来てみると書道の免許を持たない国語教員だったため、同じく免許はないものの、少しは書道に興味を持つ自分が持つ方が生徒のためと、免許外で書道持つことになったという、悲惨な経歴を持つ。しかしながら、彼は、その後免許更新講習に絡めながら、書道免許を取れる大学に夏期講座を受けに行き、通信教育で免許を取得している。実に熱心な先生であり、私たちの分科会としては大歓迎ではあるが、それにしても、道教委の人事のあり方にはあきれかえる。

高校では芸術科目として、音楽・美術とともに正式に認可され、教員数・科目開設数でいえば音楽に次ぎ多く、美

術の倍以上の学校で科目を開設している教科でありながら、採用試験がないという現状が、このような悲劇を巻き起こしている。本分科会の参加者の中には、自校に書道免許所持者が三人もいるという学校もあり、矛盾の根は深い。あらためて、この問題を解決できるよう提起したいと思う。

一 レポートの中から

レポートの内容を大別すると、一般的な授業の工夫や授業の中から見えてくる生徒のようすをまとめたもの、教育課程や学校の現状とを絡めたものに分けられる。これは、冒頭に述べたように、書教育の置かれた現状を反映している。

磯角報告(苫小牧東高)は、全日制と定時制の併置高から、生徒の学習に対する姿勢のちがいでではなく、教材費の徴収など、家庭状況が反映していると思われる内容までを述べている。このあたりの内容は、教育条件の分科会でも論議して欲しいものであるが、実習を伴う教科では、普通教科以上に厳しい現実を目の当たりにさせられる。ここは、書教育分科会の報告なので、紹介はこの程度にするが、集まった数校の違いだけを見ても、現代社会の歪みがかがわれるのは悲しい気持ちになる。



高校の書道では、従来は基本学習とされていた「臨書」（古典作品を手本に学習する方法）と発展学習と考えられていた「創作」を組み合わせた学習がなされてきたが、近年の生徒の実態と社会環境の変化から、前回の学習指導要領の改訂時に「漢字仮名交じり書」という創作的な学習を中心にすることに変化が見えていた。しかし、この方法は、全国教研や一部の実践家の中ではその以前から採り上げられていて、北海道のこの分科会に参加する仲間の中でも、創作に主眼を置いた実践が多く発表されている。

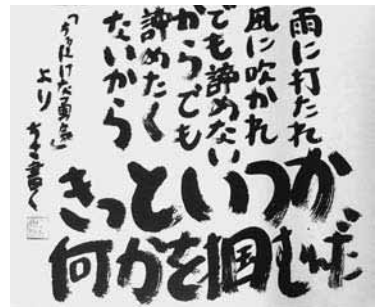
中谷報告（芦別高）では、「日々の実践からいくつかピックアップ」として、「いくつかはうた」「絵手紙」「紙刻字」「紙筆」などの紹介があり、これらもこの分科会の中から工夫されてアレンジされていた実践である。この分科会参加者の良いところは、他人の実践をそれぞれ自分流にアレンジしながら素直に取り入れているところにある。

小笠原実践（札幌東陵高）での創作の取り入れ方は、ほ

かとはまた少し違う。二時間続きの授業の半分を臨書、もう半分を創作というように並行させている。都市部の大規模校だけに、そのカリキュラムや生徒の実態から編み出された方法だ。今回は、同じ生徒が二時間で並行して書き上げた作品をたくさん紹介してくれたが、興味深く見るこ



従来は、創作は臨書の延長線になければならないとの見方が強かったのだが、私たちの研究の中では、必ずしもそうではなく、むしろ、無理に結びつけると、子どもたちの自由な発想の妨げになるとの見方が強い。小笠原実践では、同時並行でありながらも、臨書にとらわれない発想を導き出す工夫が見られる。それが「テーマ」の設定である。毎時間わかりやすいテーマを設定しながら、生徒の創造力を引き出す手助けをしているのだ。先の磯角報告の



中では、定時制の最初の授業での失敗談として、授業のねらいを伝えきれなかったと述べているが、テーマを上手に設定することで、子どもたちにはねらいが明確になり、取り組みやすくなる。

そろそろベテランの仲間入りをした伊丸岡実践(東川高)には、年間計画の中に、単元ごとのテーマが明確に示されている。「墨色研究」「書線研究」「紙面構成研究」「筆・紙の研究」「郷土に目を向ける」「先輩へのエール」などなど、この項目を見ただけでもどのような実践を目指しているかが見えてくる。

磯角報告にも、定時制の現状だけではなく、いろいろな創作への道筋が報告されている。中でも目を引くのは、鑑賞の授業を大きく取り上げていることと、合作の取り組みで、一人が何か一本の線を引き、それに合わせてもう一人が創作作品を作り上げるといふものだ。この合作は、昨年の全国教研でも発表していたのだが、早速今年は、長野の先生が取り入れていた。発想の柔軟性を養う実践である。

鑑賞の授業では、生徒個々がテーマ設定をして、それを鑑賞者に伝えることにポイントがある。伊丸岡実践にあるようなテーマ作品は、生徒にねらいを持たせる訓練の要素が強く、そこからの発展としては、自分でテーマを設定することができて初めて「創作」の最終段階に入る。しかし、

現実にはそこが一番難しく、自分で何かを考え、それに合わせて制作し、さらにその制作意図を他人に知らせるという三段階の作業には時間と手間がかかるし、できたとしても検証が大変だ。その検証から発想されたのが「鑑賞」に主眼を置いた実践といえる。

二 全国の実践から学ぶ

全国の書教育分科会は、90年の京都で開かれた全教独立後の第一回から設立され、今日に至っているが、各都道府県単位の教育研究会の中に書教育があるのは、長野・滋



賀と私たちの北海道にあるのみ。小規模分科会という点では変わらない。ただ、北海道の分科会と状況が違うのは、毎年各県を持ち回りの開催であることから、わずかながらも初参加や小中学校・特別支援学校や大学からの参加者も見られるというところにある。

幸い、北海道からは何とか毎年参加者を送り、司会者・共同

研究者も送り込んでいる。そこで、今回は、全国の実践も報告しながら、北海道の書教育への啓蒙としたい。

中学校の書写にも、高校の書道のような実践に取り組んでいる人がいる。滋賀の磯寄実践である。ここに磯寄レポートから少し引用して紹介したいと思うが、滋賀の一部には、関東の一部の地域にも見られるような、北海道では想像できない厳しい現実がある。それは、外国人労働者の入り込みと、その子どもたちの実態。貧困格差がそれにより増大し、地域コミュニケーションにも崩壊を来しているのだ。そのような地域の現実と対峙しながら磯寄実践が生まれてきている。

低学力など課題があり、支援なしでは授業に集中できない生徒も見られるが、子どもらしい素直さ、純粹さ、愛すべきキャラクターとのあいもある。また、表面化しにくく、見えにくい課題も多い。他人との関係を気にするあまり、自己表現が下手で、精神的にもろく、感情の起伏が大きい生徒も見られる。多様な支援の必要な生徒（不登校、鬱、発達障害、愛着障害など）が何人もおり、自己肯定感が持てず、ずるずると学校に来られなくなったり、外泊を繰り返したり、ますます対人関係がとりにくい子どもになっていくケースもある。特に突出した生徒に対する学校と

しての方針はというと、結構ケースバイケースで柔軟ではあるが、原則は崩さないという（その髪の毛や服装では学校に連れて行かない、式には出さないというような）部分もある。子どもが自己表現の機会を失い、他者とながら言葉を持ってないでいる。「子どもをしかる、言い聞かせる、善悪を教えるというのは、時間を掛けずに工夫もしないで、子どもの行動を都合良くコントロールしようとする手抜き教育である。楽しいことをするには、しかったり、言い聞かせたりすることの何十倍の時間と工夫が必要なのである。」ということばが、示唆を与えてくれている。

このような子ども観を持つ磯寄実践は、ここに提示した写真のように高校の創作授業のような取り組みをしている。さまざまな線の試みや、ろうけつ染め作品、今年の一



文字を作品にするなど多様である。これらの作品を見て、書写から逸脱しているとみるのか、子どもたちの実態に即して、子どもたちの個性を引き出しているのとみるのか。先に



究活動も盛んである。「新しい書の研究会」という民教連所属の団体があり、全国教研を作り上げた原動力もそこにある。

ここに例示した写真は、同じ滋賀の高校教員・藤居実践のものである。高校入学後に展開される線や墨色の学習の実践例で、先の磯寄実践とも共通している。ここで使われている紙は、普通の半紙ではなく、画仙紙半切を三分の一に切ったもので、普通の半紙の倍ぐらいの大きさだ。この大胆な基礎訓練から、大胆な作品群も生まれて来る。

下の作品も、同じ滋賀の高校・押谷実践のものだ。これは画仙紙全紙（70cm×135cm）に合作している。押谷実践の



引用したレポートの中にみえる子どもたちの実態を考えると、私たちも発想の柔軟性が求められる。滋賀県では、これらの実践を生み出すために、組織的な研

合作には、授業での作品にもかかわらず、このような全紙作品や更には全紙を二枚三枚とつないだ作品もある。

北海道の高校では、授業での取り組みでは、全紙二分の一度度が最大で、これほど大きなものに取り組んでいる例は見ない。もちろん、これをするためには、教室の条件整備も必要だし、指導する教師のエネルギーも必要だ。整然と机に向かうのが良いという考えからはできない授業展開である。

まとめ

以上、全国の実践の中から特徴的なものを紹介してきたが、もちろん、北海道の実践も成果を残してきた。その大きな理由がこの分科会の存在であり、分科会の存在があるからこそ全国ともつながれる。滋賀・長野とともに全国でわずか三県の書教育分科会存在地域であり、高校書道科の採用試験こそないが、全道には百名以上の書道に関わる教員もいる。あとは、小中との連携が必要だ。

私は、現任教（音更高校）に赴任してこの三年間、町教委との連携でさまざまな取り組みをしてきている。その中でも、夏冬休みの小学生向け書道講座と小中学校教員向け書道講座、そしてその講座がきっかけで始まった出前授業。



この報告を目にした小中学校の先生方に呼びかけます。是非、書教育分科会に足を運んでください。小学校書写の実践についても話し合っています。書写は国語だけでなく、本来独立した指導方法が研究されるべき立派な教科です。そして、もちろん書写の良い授業からは、国語へ生かす道筋も見えてきます。

今年度は、小学校の卒業式に飾る「一人一文字作品」の講師を頼まれた。上の写真である。墨も自分たちでこねて作り、大筆で記念の一文字を書いた。子どもたちはとても楽しそうだった。もちろん、このような取り組みは一年に一度のイベントだから成り立つもので、普段の書写の授業はまた違う。だから、普段の書写の授業にも取り組んでいて、今年度は、中学校で小筆による仮名文字指導の導入を出前授業で手伝った。

最後に、映画「書道ガールズ」を初めとした書道パフォーマンスが評判になっていますが、北海道でもやっています。下の写真は、5m×9mの紙に書いた本校書道部の作品です。全国でも評判になりました。こんな楽しい書教育分科会に、是非足を運んでいただくことをお願いし、報告とします。

